

岐路に立つ第2外国語

英語のみ必修／アジア言語へシフト

「大学総グローバル化」の中、語学教育の二極化が進んでいる。第2外国語（2外）を必修から外し、「使える英語」の習得に集中させる動きと、「教養」としての2外から脱し、アジアを中心とした諸言語に力を入れる流れだ。選択言語に手話を加えたり、2外と専門科目を連動させて学習意欲を促したりする試みもあり、各大学が「グローバル化」をどう捉えているかの一指標にもなりそうだ。

●「無理強いはいしない」

一橋大学（東京都国立市）は今年度、商学部と経済学部の2外を必修から選択制に変更した。「グローバル社会に貢献し得る質の高い人材」の育成を目指す中期目標に沿った、新カリキュラム導入の一環だ。卒業要件のうち、全学共通科目「英語コミュニケーションスキル」を2から8単位に拡大。「第1・第2外国語各8単位」を「外国語8（商）・10（経）単位」に改め、英語のみの履修で卒業可能とした。

「2外を無理強いするより、意欲を持った人が学べる環境を作ろうという考えだ」と蜂谷豊彦・商学部長は言う。大月康弘・大学院経済学研究科教授も「『2外必要論』もあったが、英語が使える学生をまず育てなければ」と強調する。初の自由履修となった春夏学期は、両学部の1年生573人中57人が2外を選択した。

1991年の大学設置基準緩和で「2以上の外国語科目の開設」が項目から外れて以降、2外の位置づけは各大学の裁量に委ねられている。一橋より早く、筑波、千葉、上智など多くの大学で、全部あるいは一部の学部が自由選択に変更。一方、東京工

業大学（全学部必修）や鹿児島大学（一部必修）では「なぜ英語以外の外国語が必要なのか」を説いた資料やホームページを新入生向けに用意するなど、2外を学ぶ意義をアピールする時代を迎えている。

●教養から実用へ

ドイツ、フランス、中国など話者数の多い言語中心だった2外の選択の幅を広げる動きもある。立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）では、中国、韓国、ベトナム、タイ、マレー・インドネシア、スペインの各語に注力。日本人学生は英語プラス1言語を学ぶのが基本だ。

同大言語教育センターの杉田欣二教授は「全学生の半数を占める留学生の多くが6言語のいずれかを母語とするので、『友達と話したい』という思いが学ぶ意欲を生んでいる」と話す。また本田明子教授は「話者が少ない言語を母語とする人が、多い言語に合わせる、という風潮とは異なる感覚を育てたい」と期待する。

島根県立大学総合政策学部（島根県浜田市）では、中国、韓国、ロシアの3言語を2外の選択肢としている。中国、朝鮮半島、モンゴル、東シベリアと日本の北東アジア地域を



立命館アジア太平洋大学で中国語を学ぶ学生。日本語を勉強中の留学生も多く、授業は英語で行われている

学ぶプログラムも展開。「授業では原語資料を読みこなし、毎年何人かが現地へ長期留学している」（犬塚優司教授）など成果を上げている。

日系企業の進出が進むアジアには英語での意思疎通が難しい国も多く、現地語の需要が高い。東京外国語大学（東京都府中市）でも「企業の人材育成が遅れているビルマ語は、専攻学生が引く手あまた」という。ただ一般には、2外の授業で学んただけでは、専門科目の履修や就職に生かすにはほど遠いのが実情だ。

拓殖大学（東京都文京区）では、2外を「使える外国語」にする試みを展開している。現地の語学学校で研修を受ける2外履修生に奨学金を支給する制度は、50年以上の歴史がある。昨年度はタイ、インド、オーストリアなど7カ国で計13人が学んだ。2外及びその言語に関連する専

門科目を24単位以上取得した学生に修了証を授与する制度も導入。今年度の4年生が最初の対象となる。

●手話も選択肢に

「言語」の枠を広げる動きもある。関西学院大学人間福祉学部（兵庫県西宮市）が2外科目の一つとして開講しているのは、手話。2008年度の学部開設以来、毎年4人に1人が履修している。松岡克尚教授は「言語学習とは、その背景にある文化、習慣、社会、歴史なども学ぶことだ。日本にも言語の多様性があることに気づいてもらいたい」と、手話を2外に位置づけた理由を説明する。履修生の中には、手話通訳士を目指す学生も現れているという。

「英語特化」か「多言語」か——。各大学の模索はまだまだ続きそうだ。
【上杉恵子】